お姫様は不良娘

白夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お姫様は不良娘

【Ｎコード】
Ｎ４１９２Ｄ

【作者名】
白夜叉

【あらすじ】
大貴族の一人娘”雛殿霙”はクールで口数が少ない不良のかわいい女の子♪不自由が嫌で、大事なペットのルルと共に家を出た！！！人見知りの激しい不良娘・霙が個性的な仲間と大暴れ！！！（毎月一話づつ掲載します♪）

☆プロローグ☆（前書き）

楽しんで読んでください♪

☆プロローグ☆

「……んぁ？……」

「お目覚めになりましたか？霙（みぞれ）様」

「ん…」また新しい朝が来た。そんなもの来なくていいのに…

あたしの家は金持ちの貴族らしい。名前は”雛殿”…

あたしはこの家が嫌い。

毎日不自由で嫌気がさす。それに、無理矢理お嬢様学校なんかに入れられて、苦手なお嬢様言葉で喋らなくちゃいけない。

はっきり言って、お母様とお父様に

「なぜ、あたしを産まれたのですか？」と言いたい。あたしを産んだ、お母様を殺したい。あたしを不自由と言う名の鎖で縛り付けている、お父様を殺したい……

そこまであたしを追い詰めているのに、何も知らずに平然としている、お父様やお母様がムカツク。

「糞おはよう」糞親父…話し掛けてくるな。
「……。」
「糞！！！挨拶はきちんとなさい！！！」糞婆…なぜあたしを産んだんだ。
「……学校…行ってくる…」あたしは一秒でも家に居たくないので、いつも門が開く３０分前には家を出る。
その３０分の間にそこら辺にいる、不良とストレス解消のために、喧嘩する。

喧嘩が終わったら、学校に行き、教室には行かず屋上で寝る。
これがいつもの生活。教室に行けば、訳の分からない授業を聞かなくてはいけない。
夜は父と母に嘘ついて、不良仲間と絡んで来た奴相手に暴れまわっている。

あたしは、今日不良仲間と暴れまわっているところを学校の奴らに見られた。
当然その事は学校にも親にも知れ渡り、家に帰ったら親に包丁やカッターナイフで斬られた。
「お前なんて家の子じゃない！！！！」

「出ていって！！！今すぐ出ていって！！！！」
「お前みたいな奴が居たら、雛殿家の名が汚れる！！！！」
出ていけだと？名が汚れる？家の子じゃない？……上等だよ。出ていってやろうじゃん。生憎、あたしもあんたらを親と思った事ないしね。

あたしは、家を出た。

「家……探さなくちゃ…」
すると、あたしの持っていた鞄から何かが出て来た。
「……ルル…？」それは、あたしの大事な家族。黒猫のルルだった。
「ミャー…」ルルがあたしの肩に飛び乗って鳴いた。
「……ルルも行きたいの…？」
「ミャァ」あたしがルルに問い掛けるとまるで、（（うん！！））
と言っているようだった。
「……それじゃあ…一緒に行こっか…」あたしは久しぶりに笑った。

やっとあの不自由と言う名の鎖から抜け出せたと思うとあたしは嬉しくなった。

高鳴る鼓動を胸にあたしとルルは新しい、家を探しに出掛けた……

END

☆プロローグ☆（後書き）

ここまで読んでくださって、ありがとうございます。よかったら、評価や感想頂けたらうれしいです♪これからよろしくお願いします。

☆1限目☆

「……ありがとうございました…」あれからあたしとルルは、直ぐに新しい家を見つけた。近くに高校もあったし、ペットＯＫのアパート。あたしもルルも一回見て気に入った。

引越ししたばかりで部屋が段ボールだらけの部屋にあたしとルルは寝転がった。と言ってもルルはあたしのお腹の上で、気持ち良さそうに寝ている。きっと、窓から入ってくる太陽の温かさが気持ち良かったんだ。あたしはルルに向かって、クスッと笑みを零した。
ふと、窓の方に視線を向けると、
「…うわぁ……」あたしの目に入って来たのは、淡い桃色をした、たくさんの桜が宙に舞っていた。

「……ルル」あたしがルルに呼び掛けるとルルは目を開けて、あたしのお腹の上から降りた。
「ニャン」
「ルル…あれみてみ」あたしはルルを抱き上げて、窓を開けた。すると、部屋の中に桜がたくさん入って来た。あたしは一瞬時が止まったようだった。桜が余りにも、綺麗で儚くて、なぜか切ない気がしたから……

あたしとルルはしばらくの間、その桜を見ていた。

「ルル…おいで…」あたしは窓の近くに腰を落としてルルを呼んだ。するとルルはトテトテと歩いて来て、あたしの足の間に座った。
桜はまだ舞い続けている。

「…キレーだね…ルル」
「ミャー」あたし達はその言葉を最後に、深い眠りに入った……

「…ん……今何時…」夜の８時……まだそんな時間か…どうやらルルはまだ寝ているみたい。
「……ご飯…お腹空いた…」
「……ニャー」
「？…ルル」ルルもお腹が空いたらしい。台所に行くあたしに着いて来ている。
「…お前もお腹空いたのか…？」
「ミャァ」
「…そっか。…ちょっと待っててね…」あたしは、ルルにキャットフードを入れた、エサ皿をルルの前に置いた。ルルは余程お腹が空いていたのか、ガツガツとキャットフードを食べている。
「…あたしもなんか食べよ……」引越して来たばかりなので、冷蔵庫も置いてない。食べ物はルルのエサのみ……

あたしはルルを家に留守番させて、食べ物を買う為に近くのコンビニに来ている。

食べ物を買い終わり、ルルの待っている家に帰ろうとしたら

「あっれー？霙じゃん？どうしたぁ？こんな時間に」不良仲間の藍と琉佳と華涛がタバコを吸って、コンビニの入口に座っていた。
「……今日は…何人やった……？」
「全然；；やっぱ、あんたが居なくちゃ、奴らも寄ってこないや；」
華涛があたしに苦笑いしながら言って来た。
「……わるいな…俺もいろいろ忙しいから…」あたしは不良仲間と居る時は”あたし”と言わず”俺”と言う事にしている。だって、俺はこいつらの中心だから。俺がしっかりしなくちゃ駄目なんだ。強くならなくちゃいけないんだ。

「あっれぇ～？？霙じゃーん？なに？最近顔出さないと思ったら…もう出てきたのぉ～？」俺が一人考え込んでいたら、ふざけた女の声が聞こえた。
「……お前ら…また負けに来たのか…？」こいつらは、毎回俺が居る時だけケンカを売ってくる、圭と藍梨と盟を中心とした、全部で２０人位いる不良チーム。「ふんっ！！負けんのはあんたらでしょぉ？？」
「藍梨ほっとけよ。つーか早くこいつら殺りたいんだけど♪」
「……ふん…かかってこいよ…返り討ちにしてやるよ……」
「っつ！！！なめるなっ！！！」その言葉の後、俺達は奴ら相手に暴れ回った。

ーーーーー
ーーーーーーーーーーー

「……だから…言ったろ…あたし達に…なめてかかると……酷いことになるって……な」あれから15分も経たない内に奴らを薙ぎ倒した。

「…ルル…ただいま…」
「ニャア！！」あたしが部屋のドアを開けると、ルルが飛び付いて来た。
「よしよし…お留守番偉かったね…」あたしはルルの頭を撫でながら小さく微笑んだ。ルルはゴロゴロと喉を鳴らしている。

「……あ」よく見れば、あたしはさっきのケンカで服も腕や顔が汚れていた。
「……風呂…入ろ…」

「……気持ち良かった…お風呂……Ｖｖ」お風呂から上がったあたしは、ベットの上でルルを膝に乗せて、アイスを食べながら、まだ桜が舞っている窓を見ている。
「……夜に見る桜も綺麗だね…ルル」
「ミャー」明日から学校…次は前みたいな、お嬢様言葉で喋らなくていい。でも…
「…みんな……あたしを怖がらないかな……」あたしの外見は、金髪に灰色のにごった瞳…腕はケンカの時にやられた、殴られたり斬

られた跡……
「……あたし…顔…怖くならないかな……」そのうえあたしは、人見知りが激しい。初対面の相手にはどうしても、顔が強張ってしまう。
「……はぁ…」
「ニャア…」ルルがあたしを励ましてくれるように、あたしの膝にほお擦りしてきた。
「…ルル……ありがとう…あたし…がんばる…よ」あたしはベットに横になり、ルルと明日に備えて深い闇に入った……

END

☆1限目☆（後書き）

ありがとうございます。また読んでください♪

☆2限目☆（前書き）

クラスのみんなとご対面でぃす♪

☆2限目☆

チュンチュン

「……うーん…」
「ニャア…」
「…んー……」
「ニャア」
「うー…」
「ニャア！」
「…ぅん……」
「ニャー！！！」バリッ
「…いっつー…」
「フニャア」
「……ルル…痛いんだけど……」
朝…あたしはルルの強烈な引っ掻きで目を覚ました。
「……もっちょっと……優しく起こして…ね……」あたしは、ルルにエサをあげている間に、昨日買ってきた、パンと苺牛乳を持ちテーブルの隣に座った。
窓を見れば、昨日と同じ桜の花びらが宙を舞っていた。
「……そーだ…学校……」あたしは急いでパンを食べて、初めて着る普通の制服に身を包んだ。
「…ルル…？」あたしがリビングに戻るとルルがいなかった。（（……散歩…かな…））あたしは、玄関に置いてあった、スクール鞄を肩に担ぐと、真っ白のスニーカーを履いて、外に出た…

あたしは今日から世話になる学校”夢桜高校”（ゆめざくら）の門の前で立ち尽くしていた。
「……普通の高校は……こんなんなんだ……」ぼーっと立って、高校を見上げているのがそんなに不思議なのか、道行く人達があたしをチラチラ見ている。

霙の知らないところでこんな事を言っている人達もいた。
「ねぇねぇ…あの子すんごい可愛いよ！！？？」
「ねー☆ハーフかなぁ？瞳グレーだし…」
「うっわ！！俺、ストライク！！あんなかわいこちゃんいなかったよな！！？？」
「そりゃぁ…あんなけ可愛いかったら有名だろ……転入生か？」

あたしがじぃーっとその場に立っていると
「あの～……」隣から誰かが声を掛けて来た。
「……？…」あたしはその声の方に、顔だけ向けた。そこには、黒髪のショートカットの可愛い女の子と茶髪を一つに纏めた少し気の強そうな女の子が立っていた。
「あのね、君…転入生？」
「みんな…あなたの事見て、かわいいって言ってます～」
「……そ…だけど…」あたしは急に転入生？なんて聞かれるものだから少し、戸惑いながら答えた。
「あっ！！びっくりしたよね；；ゴメン！！アタシは、風実　くずは（ふうみ　くずは）っ♪」彼女は、くずはて呼んで☆とあたしにウィンクを飛ばして来た。
次は黒髪の女の子が口を開いた。
「あのっ…私は繰橋（くるはし）　美弥子（みやこ）と言います…／／／」

「……紅蓮…霙…だ」みんなあたしが雛殿家の娘だとしったら、きっとまた特別扱いするかもしれない。
だから、わざと名字を変えた。
……貴族の娘だからってなに？
なんで特別扱いされなきゃならない？
あたしはみんなと同じ人間なんだよ？
意味が分からない…
「……れ？　　…ぞれ？　霙！！？？」
「！！！！……なに…」
「いや…急に険しい顔になったから…」
「大丈夫ですかぁ～？」あたし…そんな顔してたんだ…
「…滅多に顔に……出ないのに…（ボソッ」
「霙？何か言った？」
「……なにもない…ゴメン」
「ふーん…じゃあ職員室行こっか♪」
「そうですね♪霙ちゃんもまだ、場所は知りませんし。」
「……ん」人の優しさに触れるって…あたし…初めてだな…。

場所は変わって職員室。あたしは今このふてぶてしい男の隣を歩いている。
時間は１５分前に遡る。

ーーーーーーー
ーーーーーー

「……失礼…します……」
あたしはくずは達に連れられて、職員室前に一人で立っている。
くずはは彼氏と教室に。美弥子は委員会があるから、一緒に行けなくなった。だから今あたしは一人でいる。

「……」
「……」
「……」
「……」
「……あのさ」長い沈黙の中、その重い空気に耐えられなくなったのか、そのふてぶてしい男があたしに声を掛けた。
「……なんですか」
「あのさーこの重い空気どうにかならない？俺、こうゆう空気だけは駄目なんだよ～」
「……なら、一人で喋ったら…いいんじゃないですか」
「あーダメダメ～独り言言ってたら、鼻毛伸びるんだよ？！」そんなの嫌だーだの、なんか俺痛い人みたいじゃん！！とかギャーギャー喚いてる。
「うるさい…」あたしがギロッと睨んで言うと、水を差したように静かになった。
すると、男が独りこんな事を言った。
「そういや、霙って名前…どっかで聞いた事あんだよなぁ…」
「……有名人の名前ですか？…」あたしはそう聞いて一瞬、あたしが雛殿家の娘だとばれたと思った。
雛殿家はニュースなどの番組に出る事が有るからだ。しかし、その男は
「あっ！！いたよーな気ぃする！！」と全然気付いていなかった。

「……ハァ…」
「おいおい；；ため息なんてついたら幸せ逃げるぞ～」あたしが安心して息をはくと、男がこんなこと言いやがった。あたしがどれだけ冷や冷やしたか……
そんな事を思っていると、
「着いたぞー。ここが、霙のクラスだ～」
「……なんで名前で呼んでるんで…＞＞ガッシャーン＜＜＞ドゴーン＜＜
「こんのぉ…くそがきぃ！！！！！」
「うるせー！！！！！おまえもくそがきだろーが！！」あたしの言葉を遮り、もの凄い音が教室の中から聞こえた。
「……なんの音…？」声は聞いてみると、女の子と男の声だった。
「男と女子がケンカ…」
「霙……なんで目がキラキラしてんの？；；」「……そんな目してません…」…危ない…雛殿の屋敷に居る時は毎日男女問わずに、殴り合いしてたから…つい；；
「？ふーん…」
「…先生……このクラスは…女と男が…ケンカするのが…当たり前なんです…か…？」あたしがそう聞くと、先生は少し考えて、
「あー…まぁなーこれが普通かなぁ…」
「……普通…ですか…」なんか…このクラス…あたしの仲間がいっぱい居るのかな…？（仲間とは、不良の事です；；）

このクラスに仲間が…
と思っていると、あっ！！と先生が声を上げた。
「…どうかしました…？」
「いやぁ…俺の名前さ、まだ教えてなかったなあと…」
「…そ…ですね…」あたしがそっけなく返すと、先生はコホンと咳を一つ、
「俺は、霙の担任の”沖谷　来栖”（おきや　くるす）だ♪よろし

くな～」
「…よろしくお願いします…」あたしは深くお辞儀をした。
「あっれぇ～？先生と霙！何してんの～？」隣から聞こえた声の方を見てみると、
「くずはと…？」
「風実と宮節？おまえら何してんの？」
「…宮節…？」
「そ♪アタシの彼氏なの♪」
「こんにちは！”宮節　莱”（みやふし　らい）と言います！！えーっと…？
「…紅蓮　霙…よろしく」うん！よろしく♪紅蓮さん！」黒い髪を肩に着くぐらいの長さに大きな黒い瞳…なんか…ちっさい子供みたいだな…くずははこうゆう子が好きなんだな……
「おーい。早く教室はいっぞ～」先生が手をパンパン叩いて言った。
「はーっい♪行こー莱Ｖｖ」
「うん！！くずは！！」くずはと宮節は手を繋いで教室に入っていった。
「じゃあ、霙は俺が喚んだら入って来てな♪」
「…ん…わかった」
ガラッと先生は2年D組のドアを開け、中に入って行った。
「おめぇらうるっせぇぞ～静かにしろ～」廊下の壁に背を預けていると、中から先生のだらしない声が聞こえて来た。
「…一応みんな言う事…聞くんだ…流石教師…（ボソッ」寂しく独り言を言っていると、
「な～に言ってんだよ！！沖谷、さっき女と話してたろ！！」
「人の事言えないね！！ヘッ！！」
「お前ら…聞いてたのか……；；」
（あり？それ…あたしの事じゃん）
「まさか、沖谷！！おまえ高校生と付き合ってんのかぁ！？」
「先生彼女なんか居たんだ！！びっくりだね！！」（…あ？…だれ

があんな男の…だれが……)
「そーなんだよーあれがさー可愛くてさー羨ましいだろ!!もう、あんな事やこんな事しちゃってる仲…>>ドゴォ!!!!<<ごえぇぇ!!」
……
……
「…先生がいなくなった」
「あれだろ。きっと、どっかのトラックが突っ込んだんだろ」
「いや…ここ2階なんだけど…」
「いやいや…そうゆう事もあるんだよ。世の中はな、不思議な事が沢山起こるんだよ」
>>シュウゥゥ<<

「あっ!!煙りが薄くなってきた!!」
「…!!女!!??」
「うわぁ…女の子なのに大人の男蹴飛ばすなんて……;;」
「……だ…」
「えっ!?」
「…あたしと…この変態が……付き合ってるなんて…言った奴…だれだ…」
「いっつつ…あれ?何?この状況…;;」殺気が漂う教室の中一人の教師が目を覚ました……
「…起きたな…この変態教師……」
「…?霙?どうし…
「…忘れたとは言わせねぇぞ…覚悟しやがれ…」えっ…ちょっと?霙ちゃん?ちょっ、マジすんませんでした;;いやホント!!なんでもします!!お願いします!!許して下さい!!!霙様!!」
「…黙れ……」あたしが変態教師の上に拳を上げた。殴ろうとしたら、鞄からある者が出て来た。
「…ニャー…」

「…ルル…！？」
「……あり？…殴られてない…？…助かっ！！≪ガスッ≫ギャアアア！！！割れる！！頭割れるから！！」
「…猫？」
「なんであの娘の鞄から…？」
「でも、かわいいよね！！」
「黒猫って不気味だよな…」
ピクッ！！……不気味…？…なにが…？……ルルが…？…不気味だと……？
「誰だ…今不気味っつた奴……」あたしが生徒全員を睨みつけると、
「す、すんませんしたー！！！！！」とクラス全員があたしに土下座してきた。しかも一斉に…；；
「フニャア」≪バリッ≫
「…ルル…朝と同じとこ…引っ掻かないで……痛い……何してんの…？」土下座って…あたしが見た先には、ボロボロに砕け散った、元が何だか分からなくなった、教室のドアがあった。
「……あ；；」

転校初日。

あたしはこれからどうなるのでしょう……？

END

☆2限目☆（後書き）

感想・評価頼みます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4192d/

お姫様は不良娘

2010年10月8日12時34分発行